

かほだより

冬期間の管理のポイント

冬こそ畜舎内の換気を意識しましょう

冬場は寒さのあまり、畜舎を閉め切っていませんか？

閉め切られた畜舎は、汚れた空気（湿気、アンモニア、CO₂）がこもり、牛にストレスを与え風邪などの原因となります。

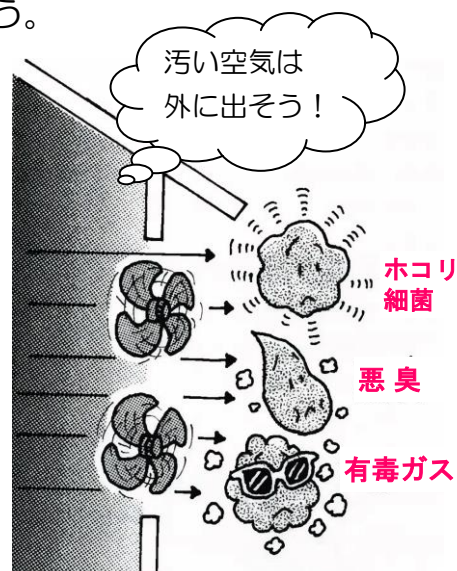
空気がよどむと食欲も落ちてしまいます。

日中の暖かい時間を見計らって窓や扉、カーテンを開け、畜体に風が直接あたらないように、ゆっくりと畜舎全体の空気を入れ換えましょう。

換気扇がある場合には、常時ゆっくり回して畜舎の換気を行いましょ

換気の回数(空気の入れ換え)
冬 5 回/時間(夏 50 回/時間)

- * 成牛は寒さに強いいため、積極的に換気をしましょう。
- * ただし、寒冷期はエネルギー源として乾物 10~20% 増給することを推奨します。
- * 去勢牛では寒さで飲水量が減少すると尿石症が発生しやすくなります。
→塩化アンモニウム(6~8g/頭/日)などを給与しましょう。



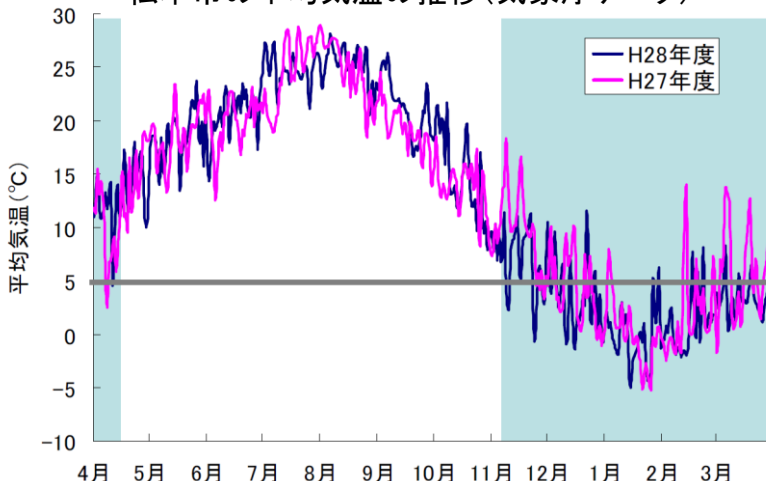
しかし、子牛は「体重あたりの表面積が大きく、体脂肪が少なく、第一胃の発酵熱が少ない」ため寒さに弱い!

特に哺乳牛は13℃以下で成長に影響するといわれています。

右のグラフは過去2年間の松本市の平均気温の推移です。

施設内の気温が外気より5~10℃高いことを加味すると、子牛にとって外気が5℃以下になる11月~4月は、寒冷対策が必要な時期になります。

松本市の平均気温の推移(気象庁データ)



【子牛の寒冷対策は裏面へ】

子牛の寒冷対策のポイントを抑えて損耗防止を図ろう！

冬場は子牛の下痢・風邪が発生しやすく、死亡事故につながることもあります。
冬本番を迎える前に、冬季の管理についてもう一度確認しましょう。

- 分娩前に下痢予防ワクチンの予防注射を実施しましょう。**
初乳による母子免疫で下痢を防止する牛下痢5種混合ワクチンや大腸菌ワクチンがあります。
- 子牛が生まれたら“へそ”の消毒(ヨードチンキ等)を実施しましょう。**
- 生まれた子牛にお腹いっぱい初乳を飲ませましょう。**
目標は出生後6時間までに最低3ℓ（できれば4ℓ）を飲ませましょう。
衛生面の不安がある場合にはパステライザーで加熱処理（65℃・30分）を行います。
母牛の初乳が十分に与えられない場合には凍結初乳や粉末初乳を給与しましょう。
- 冬期は哺乳量を2割程度増やしましょう。**
エネルギー要求量が高まります。栄養の充足は病気の発生を防止します。
なお、代用乳を給与する場合、溶かす温度は夏冬問わず39～40℃です。
- 保温ベストやネックウォーマーなどで保温に努めましょう。**
子牛は15～25℃が適温です。13℃以下は成長に影響し5℃以下で病気の発生が高まります。
- 遠赤外線ヒーターやハロゲンランプなどを常備し子牛を暖めましょう。**
出生直後の子牛や下痢、カゼをひいている子牛は体温低下が起こりやすく保温が必要です。
- 子牛の寝床は乾燥させ敷料をたっぷり入れておきましょう。**
敷料が汚れていたり、コンクリートが直に見えている寝床は、病気の発生や増体低下の原因になります。敷料交換をこまめに行い、牛床にお風呂用マットを応用しましょう。
- ハッチやシートを活用し隙間風が直接当たらないように工夫しましょう。**
冷気が直接子牛に当たらないように牛舎の出入り口方向をビニールシートで覆ったり、牛舎の内部に遮光ネットを吊して冷気を予防しましょう。
- モミ粉碎や細かいオガコの使用はホコリがたちやすいので注意しましょう。**
子牛の気管に吸い込まれ肺炎の原因となります。
- 新鮮な空気を牛舎内に取り入れるよう時間を決めて換気をしましょう。**
牛舎内は目がチカチカしたり、鼻がツンとするような刺激臭（アンモニア臭）がないように。
牛床面から10cmの高さでもアンモニア臭を感じないようにします。
- 離乳可能な飼料摂取量を満たしている子牛を離乳する。**
スターター1kg程度を連続して3日間摂食すれば離乳可能です。子牛にスターターを十分に採食させるためには代用乳以外に飲水が重要です。温湯の給与で飲水量を確保しましょう。
- 牛舎は過密にならないようにしましょう。**
ギュウギュウづめの牛舎や牛房はストレスとなり病気の発生が高まります。
- 呼吸器病予防ワクチンを接種しましょう。**
生（L）と不活化（K）があり1ヵ月齢と4-5ヵ月齢の2回接種（L-K）で効果が高まります。
- 定期的な消毒を実施しましょう。**
踏み込み消毒槽の設置、石灰散布、噴霧消毒又は煙霧消毒を実施しましょう。

畜舎環境、栄養そして管理技術の向上で病気を予防しましょう！